

# 子犬は汽車に乗って —ハチという名の犬—

平成10年5月26日～6月26日

渋谷・忠犬ハチ公—日本中の誰もが、一度はその名を耳にしたことのある有名な犬です。しかし、ハチについて、どれだけのことが知られているのでしょうか。ハチは、いつ頃死んだのか？ハチ公像はいつ建てられたのか？ハチ公像の耳は、なぜ垂れているのか？ハチはどういったきっかけで有名になったのか？当時、ハチがどのようにして世間に登場したのか、その様子を新聞資料等で紹介すると共に、ハチに関わった人々の記述から、一匹の犬・ハチの姿を探ります。

## 《ハチの年譜》

年月	ハチの主な出来事	当時の主な出来事
大正 12 年冬	秋田県内で出生	
大正 13 年 1 月	秋田県大館駅から渋谷駅へ。 東大農学部教授・上野英三郎博士 にハチと命名され、飼われる。	
大正 14 年 5 月 22 日	飼主・上野博士急逝する。 主人を失った一家は、引越しを余 儀なくされ、ハチも上野家の親戚 の家に預けられる。	
大正 15 年	上野家に返され、さらに常に出入 りのあった植木職人・小林菊三郎 氏の家に預けられる。	
昭和 3 年 8 月	斎藤弘吉氏により日本犬保存会犬 籍簿にハチの来歴が紹介される。	
昭和 7 年	朝日新聞に紹介される	満州国が建国宣言
昭和 9 年	ハチ公の銅像が建つ	

昭和 10 年 3 月	ハチ逝く 修身の教科書に収められる ハチの剥製が作成され、上野博物館に入る。	
昭和 16 年 12 月		第 2 次世界大戦開戦
昭和 20 年	戦時下での金属回収令によって銅像は撤収され、供出される。	終戦
昭和 23 年 8 月 15 日	ハチ公像が再建される。	
昭和 62 年 8 月	映画「ハチ公物語」上映	

## ■ 展示資料一覧 ■

<>内は請求記号

### 《昭和初期—ハチ公像建つ》

ハチが渋谷の駅の前に佇んでいた頃、当時の新聞にたびたびハチについての記事が登場し、ハチは、あっという間に有名になりました。渋谷駅周辺では、ハチ公まんじゅうやハチ公せんべいが売られ、レコードや映画にも取り上げられました。ハチの像を作ろうとする人が名乗りをあげた挙げ句、生前に銅像が作られることになり、その耳を立てるか否かで議論が戦わされました。また、訪れる人も多数に上りました。その間、ハチはただ、語る言葉を持たず、薄汚れた大きな野良犬として、黙々と渋谷に通いつめただけでした。ハチの本当の気持ちは、誰にも分かりませんでした。

### 1 「いとしや老犬物語」

朝日新聞 昭和7年10月4日付

<YB-2>

\*渋谷駅の前で主人の帰りを待つハチを取り上げた初めての新聞記事。

### 2 「けふの放送番組 忠犬ハチ公」

朝日新聞 昭和9年4月6日

<YB-2>

\*童話劇 忠犬ハチ公の紹介。

### 3 「ブロンズにとどめる 名犬「ハチ公」の像」

朝日新聞 昭和8年8月23日

<YB-2>

\*ハチ公の銅像(初代)製作にまつわる記事。耳を垂らすか、立てるか悩む製作者のコメントが

ある。また、作業中ぐったりしていたハチが、上野夫人が現れると、喜んでしゃいだとある。

#### 4 「演壇のハチ公 欠伸の御挨拶にヤンヤ」

読売新聞 昭和9年3月11日

<YB-41>

\*日本青年館にて行われたハチの銅像建設基金募集のイベントに関する記事。「... ハチ公が大きく欠伸をするとこれがまたファンたちを無性に喜ばせて破れるような拍手...」とあり、当時のハチの人気を偲ばせる。

#### 5 「忠犬ハチ公 死して博物館を飾る」

東京朝日新聞 昭和10年3月9日

<YB-2>

\*銅像前で行われたハチの葬儀の様などを伝える。黒白のリボンを銅像の首にかける写真が掲載されている。

#### 6 「ハチ公逝く 享年十三の老齢で」

毎日新聞 昭和10年3月9日

<YB-6>

\*ハチの死を報じる記事。上野未亡人のコメントが掲載されている。

#### 7 「「恩を忘れるな」の主 忠犬“ハチ公”の死」

読売新聞 昭和10年3月9日夕刊

<YB-41>

\*ハチの死を報じる詳細な記事。「思えば人間もまた及ばぬほどの輝かしくも匂わしき忠誠の一生であった」など、華々しく取り上げている。

#### 8 「垂らすか、立てるか 耳で一ト問題起る」

読売新聞 昭和10年3月15日

<YB-41>

\*死んだハチの剥製の製作にまつわる内容。怪我によって垂れた耳を「秋田犬特有に」立てて仕上げるか、「不具の」ままにしておくか、関係者による詮議を醸したと伝えている。

#### 9 「第1回日本犬展覧会報告」

日本犬 1-3(昭和7.12.30) 日本犬保存会

<Z18-B79>

\*当時、渋谷駅周辺を徘徊していたハチの姿が、たまたま日本犬保存会の斎藤氏の目に止まり、あまりに立派な秋田犬だったゆえ、紹介された。

#### 10 忠犬ハチ公物語

岸一敏 東京 モナス 昭和9.4

<657-118>

\*ハチの銅像が建つまでの経緯をハチの視点から描いた。

11 日本 タウト日記

篠田英雄訳 東京 岩波書店 昭和33.7 <291.099-cT23n-S>

\*昭和9年11月、当時来日していた、タウトが有名なハチを駅前で見かけた。「大変な人気だが、犬が吐くと人々は遠巻きに逃げてしまい、銅像だけがもてはやされている」と、批判した。

12 第四期国定修身教科書 尋常小学修身書 卷二  
日本教科書大系 近代編第3巻 修身(3)

海後宗臣編 東京 講談社 1962.1 <375.9-N685-K>

\*修身の教科書にハチが「オンヲ忘ルナ」というタイトルのもと、採用された。この修身の教科書は、昭和7年の満州事変の後、昭和9年から改変されたものであり、その編さん趣旨は、「忠良ナル日本臣民タルニ適切ナル道德ノ要旨ヲ授ケ」「殊ニ国体觀念ヲ明徴ナラシム」というものだった。

《戦後：ハチの真実の気持ちを探る人々》

戦後、戦時中に溶かされたハチ公像が再建され、しばらく世間に取り上げられることになかった「忠犬ハチ公」が、「その真実の姿を探る」という目的で再び雑誌等に登場し始めました。また、ハチを主人公とした映画も作られました。ハチが生まれてから、今日まで、およそ65年もの月日が流れていますが、ハチの名は衰えません。生後わずか2ヶ月足らずで上京し、わずか1年半で主人と死別したこの犬の気持ちが、なぜここまで、人々を引き付けたのでしょうか。いったい、人々は、何も語ることのできないこの犬の姿に何を求め、何を見出そうとしているのでしょうか。

13 「忠犬ハチ公の真相」

週刊朝日 昭31.8.19 朝日新聞社 <Z24-18>

\*様々な記述から、ハチが本当に忠義の犬だったかどうかを検証する。焼き鳥が好きだったことから焼き鳥目当てではないかという説や、犬はどの犬も心から可愛がってくれる人に懐くという説まで、紹介している。

14 忠犬紳士録

「咬ませ犬」 戸川幸夫 東京 角川小説新書 昭和34.10 <913.6-To376k2>

\*「ロク」という名の犬を登場させ、架空の人名を用いて、当時のハチをめぐる人間の思惑を描くと同時に、ハチを「超然」とした「愛と真実の小灯台」と呼んだ。

15 愛犬ものがたり

齋藤弘吉 東京 文芸春秋新社 1963.11 <645.6-Sa226a>

\*筆者は日本犬保存会のメンバーで、ハチが有名になるきっかけを作った人物。犬は、もとより、「無条件の絶対的愛情」の持ち主なので、忠義や恩返し行為ではなく、純粋な愛情の現われであると主張した。

## 16 日本の犬と狼

齋藤弘吉著 東京 雪華社 1964 <645.6-Sa226n>

\*ハチが有名になる前、駅員や露店の主人に邪魔にされていたことや、ハチの耳が垂れる原因となった皮膚病の話、ハチの銅縁が生前に作られた理由など、ハチをマスコミ紹介した、氏ならではの詳細な説明がある。

## 17 「ハチ公の生家とその経路」

愛犬ジャーナル 昭和50.5 新ジャーナル社 <Z18-152>

\*どのような経緯で、ハチが上野博士にもらわれることになったのか、秋田から東京まで、いつの汽車で行ったのか、等、当時の関係者の書簡をもとに考証している。

## 18 郷土渋谷の百年百話

加藤一郎編著 東京 渋谷郷土研究会 1967 <213.6-Ka624k>

\*「渋谷のハチ公」に寄せた人々の川柳がいくつか掲載されている。それぞれ、読む人々の気持ちが、駅にたたずむハチの姿に託され、率直に表現されている。

## 19 鉄道と街・渋谷駅

宮田道一，林順信著 東京 大正出版 1985.3 <DK53-337>

\*ハチの紹介記事を書いた記者の話が掲載されている。当時の記事には、幾分か虚構が混じっていたけれど、あまりにもハチが有名になったので引っ込みがつかなくなったと述べられている。

## 20 「東京歴史紀行」

井出孫六 <Z3-96>

エコノミスト 64-11(昭和61.3) 毎日新聞社

\*昭和9年を境に、ハチは「名犬」から「忠犬」になり、その背後には、昭和7年の満州国建国に始まる暗い世相があったと述べた。また、渋谷に通うハチの行動を秋田犬の強い帰巢本能に基づくものであり、生まれたばかりの子犬が遠路、汽車でやってきたことを考えると、渋谷の貨物室はハチの原風景として重要であるとした。

## 21 ハチ公物語

岩淵桂造絵 新藤兼人作 東京 1987.8 <Y8-4462>

\*この作品はフィクションである、と後書きに述べてある。「忠犬」という呼び名に抵抗を感じた筆者が、明確にフィクションと主張した。また、動物も生き物として同格である以上、双方の間にあるものは、飼われたことへの恩義ではなく、相互の信頼関係である、とした。

## 22 ハチ公物語

新藤兼人原作 田中一江著 東京 集英社 昭和62.7 <KH596-997>

\*映画を小説化したもの。あとがきに「恩義だけで渋谷駅に通いつづけたのは納得できない」と述べ、「飼われた恩だけで」「通いつめる犬なんて、むしろプログラムされたロボットみたい」「ハチが追われても追われても渋谷に通ったのは、やはり、それだけ上野博士を慕っていたあかしだったと思うほうが自然な気がする」とある。

## 23 「ハチ公物語特集」

キネマ旬報 1987.8.1 キネマ旬報社 <Z11-158>

\*映画化された当時の特集。製作に当たり、「ハチの運命と人間の運命をダブらせる、ハチの運命を人に投影させるという基本的な確認」のもと、シナリオが作られた。また撮影の中で感じられたこととして、「犬が人間とのかかわりでは他の動物に比べて独特なんじゃないか」と述べている。

## 24 「朝日新聞が作った「忠犬ハチ公」神話」

文芸春秋 66-10(昭和63.8) 文藝春秋社 <Z23-10>

\*もともとハチの記事は、虚構を織り交ぜて書かれたものであり、朝日新聞が頻繁に取り上げることと戦争を控えた時代の流れの中で、忠犬ハチ公が誕生したのだと主張した。

## 25 ハチ公文献集

林正春編 東京 理想社 1991年4月 <RB651-E168>

\*当時ハチを頻繁に取り上げた新聞資料を初め、ハチを扱った図書・雑誌資料を網羅的に紹介している。しかし、一般的な文献目録という形式ではなく、自身が取材したエピソードも含め、ハチ公の出生から現在までを時系列で追い、ハチ公の本当の気持ちを解き明かそうとする。

◎請求記号が YDM 及び YB ではじまる資料は、マイクロ資料でのご利用になりますので、展示期間中でもご利用になれます。

国立国会図書館 03-3581-2331(代)

ホームページアドレス <http://www.ndl.go.jp>

■国立国会図書館 ■□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□■03(3581)2331 ■